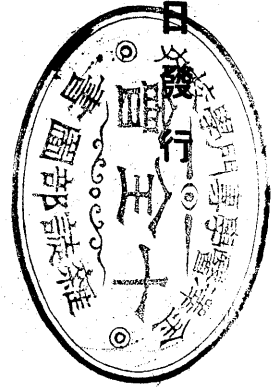


大正五年二月一日  
冬月拾參日



# 十全會雜誌

卷一十二第  
號二第  
(號一十二百第)

全澤農學專門學校十全會

# 十全會雜誌 第二十(卷第二)號 目次

## ○原著及實驗

●末吉氏ノ尿蛋白定量法ニ就キテ。

醫學博士 須藤 憲三

●酸漿黃色ニヨル脂肪ノ新染色法。

Eine neue Fettfärbungsmethode mit dem Physalisgelb.

金澤醫學專門學校解剖學教室

岡本 規矩男

●福士博士「組織ノグラチン包埋法」ニ就テ。

Über die Gelatinebehandlung des Gewebes

nach Prof. S. Fukushi.

金澤醫學專門學校解剖學教室

岡本 規矩男

●木内博士尿診斷ニ就テ。

Ueber Kirschliche Urindiagnose.

眞下 誠

●「トラホーム」ノ統計的小觀察。

醫科四年級 小山 元燾

## ○雜 錄

●第三回遠足記。

●第四回遠足記。

●圖書月報。

●第十六回講話大會。

醫 肆 知 知  
橋 本 原 生  
學 生 生

## ○叙任及辞令

●金澤醫學專門學校。●文部省。●石川縣。

## ○人 事

●開業。●訃音。●入會。●轉居。

## ○會 告

●校外特別會員會費納附調書。●創立二十五年記念館寄附金第十八回報告。

## ○廣 告

●上田先生鑄銅像完成に就テ。●上田教授在職紀念品贈呈釀金第一回第二回報告。

ナリン」液ヲ注射ス。

三、此クシテ後、助手ヲシテ角板ヲ保持セシメ、西洋楊子ヲ以テ、結膜面顆粒ノ存在部ヲ充分抓擦シ、顆粒ヲ盡ク擦去シ後、五千倍「昇汞水」ヲ綿花小球ニ浸シ、結膜面ヲ摩擦スルコト數回ニ及ビテ、後「ボール」水ノ洗滌ヲ行ヘリ。此ノ手術時ニクナツプ氏「ロールツアング」ヲ使用シタルコトアリシガ、充分小顆粒ヲ壓出スルコトヲ得ズ、不便ノコト多カリシ爲メ、只二三回西洋楊子ト共ニ併用シタルニ過ギズ。

此クシテ、手術後ハ、眼ノ刺戟ヲ避ケ、安靜ヲ保タシムルト同時ニ、化膿性細菌ノ侵入ヲ防ギ、一方充血及浮腫ヲ去ル目的ヲ以テ術後四日間。患眼ニ「ボール」水ヲ浸セル「ガーゼ」片ヲ眼瞼上ニ置キ、其ノ上ニ綿花ヲ置キテ、假綿帶ヲ命ジ。術後ハ日々通院セシメテ、其ノ經過ヲ注意シ、大ニ此レガ治療ニ努メタリ。手術ノ翌日ハ、結膜面ニ、白色ノ義膜ヲ有シ居リシガ、數日後ハ、全ク消失シ去リ。未ダ一ヶ月ヲ過ギザルニ、大ニ輕快シ來リ、内ニハ最早全治ノ傾向ヲ示シ居ルモアリテ、心私カニ愉快ノ感ニ堪ヘズ。然シ、自分ハ、此レガ治療ニ著手シテヨ

リ、日猶淺キ爲メ、治療後ノ成績ニ關シテ、精密ナル報告ヲ、此處ニ發表スル能ハザルハ、遺憾ノ至リナリ。然シ前述ノ如ク其ノ經過ニ付キテ見バ其ノ成績至極佳良ト言ハザルベカラズ。今多クノ成書及雜誌等ヲ繙クニ、本症ハ輕症ノ如ク見ユルモノモ、意外ニモ、全治迄ニ長日月ヲ要シ、又此レニ反シテ重症ノ如ク見ユルモノモ、割合早ク全治スルコトアリト云フ。ニヨレバ或ハ前述ノ如キ患者モ、今迄佳良ノ經過ヲ取ルト雖モ、今後ハ、意外ニ長キ日月ヲ要スルヤモ計リ難カルベシ。

蒼皇筆ヲ執リコトトヲ要領ヲ得ザル所モ又少カラズ諸君之ヲ諒セラレンコトヲ。

## 雜 錄

### ●第三回遠足記 知 原 生

大正四年十一月七日(日曜)河北潟畔に加賀神社を訪ひ、乘けて深谷の靈泉に一日の行樂を繼にせり。

午前八時淺野川大橋に集合。朗かなる碧空、晶々たる日光、秋晴何ぞ爽なる。一行は相前後して淺野川大橋を渡り、森ト、春日、大槌の長き町を通

り過ぎて、初て洋々たる大氣の中に出づ。やがて森本停車場を傍に見、二日市を過ぎて、いつしか加賀神社の所在地たる湯端新に着く。村を縦貫する運河、運河狭きまでに浮べる一種異型の船方に河北湯の遠からざるを思はしむ。聞くならく、此の附近は、元、全くの不毛の地なりし藩主前田綱紀公會々鷹狩して此の地に遊び、その開墾すべきを認めて、寛文十三年の春、農伊兵衛に命じて銳意このことを決行せしめし。今や段別百十四町餘歩に及び收穫三千石に上る云ふ。村民その餘德を稱へて綱紀公を此の地に祀る。加賀神社は即ちこれなり。

嗚呼、綱紀公が一片の丹誠は、凝りて尙よく二百五十年後の民を潤す。げに生は短く事業は長し。一行は暫時加賀神社に休憩す。此の間、外科醫員野坂氏を煩して紀念の撮影をなす。午前十一時過ぎて一行は此の地を去り、もこ來し道を二日市を経て今町迄引き返へし、こゝより東に折れて山越に深谷に出でんとす。一行は漸く空腹を訴へしかば、小高き岡に上りて辨當を開く。水よりも澄める空氣の中に、青き高き空を仰ぎ、十里の沃野を一望の裡に納めつゝ、喫する辨當、誰かこれを所謂山海の珍味に若かずといふものぞ。やがて此處を去り、道もなき山を、各自、思ひ思ひに登る。山も秋、稍、深うなりぬ。何の樹殊に色づき何の葉殊に落ち初めしといふにあらねど、林、漸く疎に、山骨、稍、寒し。小さき山なれど登り盡して、顧みれば嚮には見ぬざりし河北湯の漫々として一大鏡を開くを見る。更に此の山を彼方へ下り盡して森本より通する一の街道に出づ。この邊一帯を稱して深谷といふ。吾等一行は石屋といふ湯屋に着く。三方、山に圍まれたる奥まりたる處にて、靜寂限りなく、變氣冷かに凜然人に迫る。源泉はアルカリ泉にて「ラヂウムエマナチオン」は一立中七・一三「マツヘ」を含有すと云ふ。此處にて相互談笑に耽ること約二時間にして午後四時に近く此處を出發して歸途に着き、野田を経て小原谷往來に合し森本に出づ。途中早くも日は彼方の山に没し、入相告ぐる寺の鐘は杳々として野末を渡りぬ。

#### ●第四回遠足記 知 原 生

大正四年十一月二十三日(新嘗祭の當日)此の年最終の遠足として鶴來を経て、辰ノ口の源泉を尋れ、松任に歸路をせらんとする行程十餘里に亘る壯舉を企てぬ。

午前八時、犀川大橋に集合。今日も亦玉の如き霽となりぬ。遠く彼方に聳ゆる醫王の嶺は雪を帶ぶ。さやかに雪を帶ぶ。その高く、透明なる晩秋の空に襯し、日光に輝くことの麗しさよ。一行は意氣揚々、相前後して鶴來往來を進む。四里の坦途、知らぬまに、行き盡して、手取川の濤、鶴來の町に着きぬ。ある者は白山神社に参拜し、ある者は直に手取川を渡りて辰ノ口に向ふ。吾等の一部隊は手取川の堤に寄りて辨當を認む。こゝは深淵にや、映々たる河水は音も立てず、靜かに、息まずに、流れ流れて限りなし。空には、一點の雲なく、日光は晶々として、到らぬ隅なれども、さすがに、そよ吹く風は冷かに、秋の深さを思はしむ。乃ち、立つて辰ノ口として行く。午後三時頃辰ノ口に着き松崎といふ湯屋に先着の部隊に合す。

こゝは鹽類泉なりと云ふ。此處に於て外科の醫員近藤氏、野坂氏自轉車にて吾等の一行に加はらる。時は早くも五時に近く、電燈の光はぼんやりと室内を照す。一行は、稍、周章の體で此處を出發す。日は既に落ち、雲のされ目に一抹朱をばかせし殘照もゆくゆく消え失せて、一行の行手、最早、人影なく、物音なく、燈影なし。唯、蒼々たり、茫々たり。里人に教へられし、山田の渡といふを渡る。こゝは川幅いそ廣けれど、水は瘦せ、涸れに涸れて、所謂全石の川床の一部を流れ行くのみ。これより、一行は、益、道に迷へり。果ては道もなき畑の中を縱横無盡に歩む。やがて十七夜の月は遙か彼方の森の上に出でつ。洞然として、未だ光なし。此の時、遅くまで田の中に働く人にやありけむ、何事かなしつゝある二人の男に遭ひ、漸く、道を聞くことを得て一の村に出づるを得たり。それより安吉、劍崎、

平松、倉光等の村々を経て松任に着きしは七時二十分也。八時迄に集合することを約して、各自、空腹を醫するにつむ。月は今や高く中天に懸り、高空雲なく、清光千萬里、眞に晝の如し。樹影黒く亂る、道を、悠々、野々市を経て金澤として歸る。やがて犀川橋上に、今朝出發の光景を思ひ浮べし時は既に十時を過ぐる頃なりし。

## 圖書月報 (其十七)

### 醫肆橋本學

▲最新刊の寄贈圖書並に著者芳名左の如し。

醫師藥劑交付權論 全一冊 一部

東京醫科大學教授醫學博士 片山國嘉 贈

▲大正四年十一月横濱市伊勢町田中千里氏の寄贈にかゝる圖書雜誌左の如し。掲げて以て特に御厚志に對して深厚なる敬意を表し、永く本館に備へて古事を尋ねるの資となる人事を報ず。

F. C. Donders. Beknopt Handboek der

Ophoeelkunde (1830) 一部

I. R. Dompeling. Handboek voor Schieps-

Ganeeskunigen. (1844) 一部

G. F. Most. Encyclopedisch Woordenboek der

practische Genees-, Heel- en Verloskunde (1835-8) 一部

G. F. Most. Supplement op het encyclopedisch

Woordenboek der practische genees-, Heel- en Verloskunde. (1838) 一部

J. Kraemers. Algemene Kunswoordeboek (1893) 一部

三宅 秀 病體剖觀示要 (明治十二年) 一部

三宅 秀 病理各論 (再版) (明治十五年、六年) 一部

東京醫事新誌

明治十一年分 (自一至四〇)

(但二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一五、

一六、三八、三九欠)

明治十二年分 (自四一至九二)

明治十三年分 (自九三至一四六)

明治十四年分 (自一四六至一九六)

明治十五年分 (自一九七至二四八)

明治十六年分 (自二四九至三〇〇)

(但二七七欠)

明治十七年分 (自三〇一至三五二)

明治十八年分 (自三五三至四〇四)

明治十九年分 (自四〇五至四五六)

明治二十年分 (自四五七至五〇九)

(但四九一欠)

明治二十一年前半年期分 (自五一〇至五三五)

▲大正四年十月下旬購入の圖書如左。

古武瀨四郎 有機養素附酵素

山田・谷口 生理學粹 (六版)

志賀 潔 臨牀細菌學傳染病論後篇 (三版)

橋本節齊 近世診斷學 (七版)

木村徳衛 内科治療全書 上及中卷

入澤・安藤・村松 老人病學 下卷

笠原道夫 新生兒病學

赤松 純一 近世口腔病學

山村 正雄 山村外科診斷學各論 (三版)

三輪 德寬 三輪外科叢書第十五篇外科的疾患と日光療法

土地 慶藏 理學的療法

二村 領次郎 近世解剖學 (四—五版)

須藤 新吉 ゴントの心理學

中島 泰藏 個性心理及比較心理

山内 繁雄 細胞と遺傳

山内 繁雄 遺傳論

S. Ikeno, Zikendengaku.

▲自大正四年九月一日至同年十一月三十日閱覽總員一千三百七十人也。  
其内譯如左。

特別 受験生	醫四	醫三	醫二	醫一	藥學
九月 五四	〇	一七六	一六五	七七	九〇
十月 四七	一	三一一	一八一	一八七	七五
					〇

▲『寂しさに赤き硝子を透かし見つちらちらと雲のふりしける見ゆ。』と北原白秋の歌へる如き雪降る頃——大正四年一月のある日、雜誌部員のひととして圖書室に入りしより早や十閱月、去るにても『月日は長きものにてある哉』と詠める古人さへあるに、唯茫然と手を拱れてありし自らにさりては、最と短かきものなりき。『言ふは易く、行ふは難し。』との金言あるも自らには思ふは容易行ふは至難と言換へたき心地こそすれ。▲取るに足らぬ自らにも抱負も小さき乍ら存し、理想も低き乍ら有ちたりき。而も刻々寸蔭は流れ去れども、計劃の一端をさへ爲すに難く、漫然と過ごし去りし事を思ひ泛べて、不用意に圖書室に飛び入りし身の痛く恥とする所以也。徒に先輩の端尾に附して途中其事業を汚せる事その罪決して輕からざる也。特に恐る、自ら改良と信じて爲せる事却て改惡な

りしものあるや。則ち今に至りて三度仰ぎ三度俯して以て寛容なる先輩者に自らの禮を失へる事を謝する所以也。

▲而も恩師松原先生を初め、雜誌部諸先生には克く凡庸の資を指導し給ひて、其道を踏み外さざらしめ給へる事、誠に感銘措く能はざるものあり。尙併せて金澤病院耳鼻咽喉科諸先生には在室中種々の好意と便宜とを垂れ給へる事を記し、以て本誌の餘白に於て深謝の形を止めんと欲するもの也。

▲加之、同級の雜誌部委員諸兄の御同情に御友誼に對して滿腔の感謝を捧ぐ。特に内海元一郎學兄が不斷の Advice and assistance を與ふるに吝ならざりしを銘記して忘れざらんす。

▲今や時正に大正聖天子御即位の大典にあひ奉り臣民として至幸至福の日を迎へ且つ送るを得るの時、我が圖書室は新に精力主義の南兵太郎氏を得て將に更に發展の域に向はんとしつゝあるもの、自らも亦大いにその前途を祝福するもの也。

▲維時大正四年十一月十四日微恙を得て圖書室を出づるに當り一文を草して以て過去十ヶ月の怠慢を會員諸兄に詫ぶるの辭となす。

▲最後に駄作の二三を並べて自らの記念となす。  
佐保姫の御駕(みくらま)もござと呼びて見る遠野の端より春閑(た)け來れば。

音もなう遠き白波見ゆる也春の陽(ひ)うらゝ照る岡青し。

病上り歩み疲れて首荷花咲く廣場に蹲まる哉。

默(だんま)りて沖に白帆の通ふ見ゆ嬉しかりけり真き便信(たより)こそ。

煌々(くわうくわう)と日の照る夏の眞午間(まつびるま)青柿一つ落ちにけるかも。

弟の標本箱に掲羽の蝶々かなしく残りける哉。

快よき朝の睡りを半ばにて一日一日を過すわれ哉。

萩の花一つ一つがこぼれ來(き)ぬ小(ち)さき揺るぎにあれば惜しや。大宇宙に一人あるこそ書めくる秋の夜床しくいさど更かしぬ。

螢はた雪なき長の秋の夜はダングステンのいさど尊き。

## 第十六回講話大會 (大正四年十一月廿四日)

秋の空、爽に晴れ、薄ら寒きそよ風の、袖下をくぐる本日、本部大會は、開催せられぬ。定刻以前より參會者、滿堂に溢れて、北陸辯論界の權威たる、我講話部の意氣、頓に、昂り、既に、その盛會を、思はしむ。殊に、特別會員諸氏の、例年に比し、甚しく多數、參列せられ、且有益なる、御講話を賜りたることは、感謝して、やまざることなり。尙、今後毎年の大會には、益々奮つて、御參會、平素の御蘊蓄を、被歴せられ、併せて、後進會員の爲め、裨益せられん事を期す。

今回の大會に於て、通常會員より本日出演中の最雄辯家、四名(各級より一名宛)を選擧し、我部メタルを呈し、以て、その名譽を表頌す。その氏名左の如し。

紺田孫助君 船越光彦君 中井芳雄君 中谷正知君 藥福富重雄君

### 開會ノ辭

須藤教授

諸君！私は講話部の一員として諸君に一言申し上げたいと思ひます。十全會の目的は、体育、智育、德育を涵養するにあることは、今更申す迄もない事である。而して吾も講話部は殊に後二者の圓滿なる發展を促かすべき任務を有つて居るのであらうと思ふ。此目的を貫徹することは、實に容易ならんことであつて、獨り吾々部員のみならず、校友全般の強固なる決心を要するは勿論である。そこで、此希望を完からしむるには如何にすべきか。之れ元より一朝一夕の論ではないが、總て何事によらず、之れを成就する

には夫に順序がある。で、先つ思想を高尙にし、善き方面であれば些細の事をも等閑にせぬ様に心掛け、身自ら之を實行すると云ふ事であらうと思ふ。

次に一般生徒諸君に一言致します。私は諸君に向つて演説中は務めて靜肅にせられんことを希望致します。申す迄もなく、演者の言ふ所、必ずしも聽衆を首肯せしめ、満足せしむるものでない。此時に當りて、冷笑をあびせ掛け、又は妨害を加へ、甚たしきに至りては遂に罵聲を放つと云ふ様な事は決して少くない、否、寧ろ甚だ多いのである。誠に不作法の極である。或人は云ふた、如斯は單に學生間の演説會に於て行はるゝのみならず、堂々たる大議場に於てすら、尙且つ然りである。到底施すべきの術なしである。夫れ或は然らん。併し私の考は少しく、之れを其趣を異にして居る。即ち現在の各學校生徒諸君は實に堂々たる議場乃至演壇に立つべき人の卵である。かの議場の亂雜なるは、實に卵種の不良なりしに胚胎せるものであらう、諺に曰く、*What a wicked first*、と、是決して無稽の言に非ず、實に今日に於ける自然科學の教ふる所である、劣性を學ばんとするが如きは、誠に遺憾の極である。若し異議、異論あらば堂々と論すべきである、惡罵を放つても何の効力あらん。西歐の事必ずしも良いではないが、往々我邦に於て見るが如き、亂雜極窮なき演説會は西歐文明諸國に於ては絶て見るこそが出來ぬ様である。嘲笑、惡罵を放つことを以て活氣あり、勇壯なりなごと思惟するが如きことあらば、是れ眞に耻つべきことである。如此實に些細事に屬する様ではあるが、併し特に諸君の一考を煩はす所以である。

終に本日の出演生徒諸君に一言致します。本日の出演者は斯く多數であり、殊に來賓諸君の御演説も多數にあるのであるから、演説時間を厲行せられんことを希望致します。それで三分前即十二分になると鈴を鳴らして注意を與へることに致します。一言所感と希望とを述べて開會の辭に代へる次

第である。

上級生に望む

醫一 若 林 國 男 君

我が校風を、將來益々、發揚するは、吾人下級生の一大責務なり。而て吾人が過る所なく、之を指導するは上級生の責務なり。されば上級生諸君は吾人下級生の眼が常に、諸君の行動上に、注がれ居るを、思ひ小にしては校風發揚のため、大にしては國家のため、下級生の模範たるべき、堂々たる行動を、取られん事を切望す。

元 氣 論

醫二 楠 教 惠 君

元氣の要素に三ヶあり。一、生理的要素。二、心理的要素。三、哲學的要素なり。此等要素を、適當に使用せば、人皆心神爽快元氣潑刺たるを得む。

煩 悶

醫一 竹 中 巽 君

吾人は、區々たる煩悶を捨て、自ら進で、偉大な煩悶を、迎ふるの覺悟と、意氣と、を要す、しかも、この煩悶を解決すれば、更に、より大なる煩悶を求め、かくして偉大にして且華々しき、煩悶の中に、死する事を以て理想とするものなり。

筆記制度に就て

醫二 仲 井 芳 雄 君

現今、我が國、中等程度以上の諸學校には、筆記制度を取り。ために學生は筆記万能主義に流れ筆記に食傷す。

而て筆記は時を費す事多くし効少し。宜しく他に良法を求め以て、經濟的に、且つ多くの興味ある、實驗或は他の方法により、美化せられたる、講義によりて愉快に、學ぶ事を得ば、吾人の大なる、幸福なり。

TUMの要求

醫三 船 越 光 彦 君

吾人は經驗の裡に隠れ、理想を捨つる者を悲しむ。理想と熱誠と一我主張に殉じたルーツは宗教改革に依り生れた。素樸な理想に生きつゝ有る獨乙人は常にTUMを誇りとする。光輝ある我旗の下に嵩高渾然たるTUM

の發現を望む。

身体的及精神的畸形の發生

松 原 教 授

いづれ近き將來に於て本誌上に詳しく發表せらるゝ筈。

人 生 小 觀

醫四 狩 野 藤 作 君

吾人の目的は、瞬間／＼に於て變化するものにして、終始一定せるものにあらず、只自然の要求に従つて刹那の努力を尙ぶ。

丁稚制度について

藥一 福 富 重 雄 君

本制度は十四世紀の頃獨乙に始まり、爾來幾多の變遷を経て、更に賃金制度起り現今はこの兩制度交渉の過渡期なり。

現 代 主 義

醫一 近 藤 政 義 君

時は、永久なるものにして、未來も過去も人爲的區別にすぎぬ。されば未來を信するものは、現在を重すべきなり。故に吾人は、永遠なる人類が、永久なる時を期して、理想に到達せんとするものにして、是れ餘の現在主義の眼目なり。

由來日本人は演説を聞く耳がない 醫三 瀧 上 伊 織 君

現代青年輩は常淫猥文學のみ愛讀し演説を聞く云ふ觀念が更に無い、是れは古來我國に殆ど雄辯がなかつたのである然し時勢の進歩と共に辯論の必要は日々加わるのみ諸君幸に講話部あり大會、例會の區別なく出席且つ辯論を練り淫猥文學を罵倒し惡風に囚はれつゝある青年の耳に警鐘を亂打し以て覺醒を促さんことを願ふ。

氣 合 術

醫四 紺 田 孫 助 君

對者の精神の虛實を察し、實を避けて、虚をつくを、氣合術の原理とす。氣合術に、凡そ五法あり。一、轉氣法。二、挫折法。三、誘念法。四、利用法。五、放任法。之なり。

城 畔 に 立 ち て

醫一 中 谷 正 知 君

廢殘せる古城の畔に立ちて冥想に耽る。智、仁、勇、法、徳を兼備せる、



水は、理想的英雄の典型にして、且つ動的、千古不動の山の毅然たる意氣と精神とに讃仰し且つ靜的なるを思へば修養にも亦、動靜の二方面なかるべからず。然も修養は古くして尙新らしき問題なり。今にして尙眠らば、永劫に盲者となり、靈の形骸となり終らんのみ、宜しく醒めて華やかなる世界に向て突進すべきなり。

#### 遺傳と運命

醫三坂東三範君

生物は、總て遺傳と運命とに、支配され、吾人、人類も、亦生物の一簇として、その支配を受く。教育は、遺傳質の、開發に他ならず、而て遺傳質は化學的要素の如く増減せず。故に凡夫なる祖先より遺傳質を受けたる、吾人は、又、凡夫の領域を越ゆる能はず。

#### 閑

醫四川名達雄君

近代文明は生活難を産んだ、閑は生活難と密接の關係がある閑は個人生活難然の要求に出て、日本國民性好閑の精神を素質とす、先輩諸氏は閑の寵兒ではなかつた、吾人はこれに對して如何にするか。

#### 時代思潮

特布瀬七一郎君

時代精神は、其時代の奥底に、炎々として燃え狂ひ、間隙を得て噴出せんとす。ワットの發明、コッホの發見、皆時代精神の發現にして、若し彼等なかりしとするも必ずや他の噴火口を俵りて時代精神は噴出せしならん、而て時代精神をしてその發現の噴火口に導くものは天才と奮闘なり、故に吾人は大いに奮勵努力して時代思潮の發露に力め、以て我母校の名聲を發揚せられむことを望む。

本年度實驗したる疫病様患兒の病原的知見に就て

特中村欣一郎君

本題に就き種々有益なる實驗例を説明せらる、兒玉教授の討論ありたり抄録の誤りなきにしもあらざるを恐れ他日本誌に報告せられん事を願ひ置きたり。

哺乳兒各月に於ける先天性「チフテリア」  
毒素防禦体に就て  
特塚本政次君

全上

腸「チフス」菌の地中に於ける生存期間に就て

兒玉教授

いづれ本誌に發表の筈。

洋の東西

特越村甚次郎君

東洋と西洋とは、種々の点に於て、甚だ異れりて、家庭の制度、建築、衣類、學術、体格、皮膚、毛髮等の差異に就き面白く且、有益に説明せられたり。

落々の響、颯々の音

特松井啓君

今日は、醫藥分業の可否を、論すべき時にあらずして、其實施の時期を議すべきなり。今日直に實行し得べからざるは明かなる事なれば、或一地方を限りて數十年間に實施し、以て、漸次全國に及すべきものなりと信ず。

末吉氏尿蛋白定量法に就て

須藤教授

本文参照

糖尿病患者の胃の官能に就きて

特近藤清吾君

演者は糖尿病患者の胃の官能に就きて文獻の一般を紹介し、次に自家の實驗胃の内容検査、七十回に基き胃の自覺症なき糖尿病患者に於てすら其二四、九%に胃液の游離鹽酸欠如せるを見、糖尿病患者の固有的食餌療法前に胃の内容検査の必要を述べ、演者の實驗による胃内容検査時の胃液の酸度并に運動力に就きて詳述せらる。

余の希望

特村田醇君

利己心大なれば小にしては一家、大にしては、一國が亡ぶ。我國の現在を見るに利己心は各階級に蔓延せるを知る甚しきは學者間にも、この傾向あり。利己心は禽獸の心なり。余は人生の目的は利他にありと信ず。孔子の

仁義、釋迦の慈悲、キリストの愛、皆利他なり、故に余は利他を以て諸君の天分させられむ事を、望む。

丹毒に就て

特 山田孝太郎君

丹毒患者四十有餘例に就きて試みられたる連鎖狀球菌血清の効力を説かれたり。詳細中村君同様。

北陸大學

特 飯森益太郎君

我が金澤醫專は、全國醫事中最も古なるもの一なり。而て今や大阪醫學校の既に大學に昇格せるあり、吾人は裏日本唯一の大都市なる金澤に於て大學の存置せざるを以て遺憾の極とす、宜しく大學期成會を組織し可及的なき未來に於て、大學の設立に向つて奮闘せざるべからず。

閉會之辭

須藤部長

秋の日、漸く暮れ、須藤部長立ちて、閉會の辭を述べらる。時に午後六時、盛會裏に散會す。時間の都合上、福士、田村兩教授の御講演を、仰ぐを得ざりしは、實に、遺憾の極なりき。さても我講話部の發展、年經ると共に目醒しく、今や、裏日本辯論界の第一人者たり。諸君益々奮つて、本部の發展、向上を計られむ事を切望す。(講話部委員記)

## 叙任及辭令

### ●金澤醫學專門學校

依願囑託ヲ解ク

十月二十七日

小兒科學副手 奥山義盛(四三)

金澤醫學專門學校醫學士 佐伯義久(大三)

小兒科學副手ヲ囑託ス 月手當金貳圓給與

### ●文部省

給八級俸 十二月十八日

金澤醫學專門學校書記 加藤誠四郎

任沖繩縣技師 (二月十四日)

田中吉六(三一)

金澤醫學專門學校醫學士 松田茂(大二)

雇申付 月俸金貳拾圓給與 十月三十一日

病理學副手ヲ命ス

金澤醫學專門學校醫學士 川原武夫(大二)

醫化學實習授業補助ヲ囑託ス 十二月六日

月手當金貳拾圓給與

解剖學教室雇 河原芳長

自今月俸金拾八圓給與 十二月十五日

細菌學教室雇 石黒四郎(大二)

依願雇ヲ解ク 十二月二十二日

金澤醫學專門學校醫學士 時國恒夫(大四)

雇申付 月俸金貳拾圓給與 十二月二十二日

衛生學及細菌學副手ヲ命ス

金澤醫學專門學校醫學士 岡部博(大四)

細菌學副手ヲ囑託ス 十二月二十三日

化學及分析學礦物學副手ヲ囑託 吉田正元

依願囑託ヲ解ク 十二月二十五日

金澤醫學專門學校藥學士 龜井錄一郎

雇申付 月俸金拾六圓給與

化學分析學礦物學副手ヲ命ス

●石川縣

金澤病院醫員ヲ命ス

十二級俸給與 内科二部勤務ヲ命ス

小堀 茂雄(大四)

人事

●開業

●梶川靜夫氏(四一卒業) は久しく金澤病院内科二部主席醫員として勤務せられしが昨年十二月職を辭し金澤市上松原町七番地にて開業せらる

●訃音

●前田爲吉氏(大三卒業) は去年十一月十九日午後三時死亡せらる茲に謹て哀悼の意を表す。  
●林喜久男氏(大四卒業) 氏は昨年十二月二十三日病氣にて逝去せられたり茲に謹て哀悼の意を表す。

●入會

山形縣最上郡大藏鐵山警局 井澤 篤治(大元)  
東京市麴町區丸ノ内東京鐵道病院 細川 孝一(大二)  
愛知縣東春日井郡守山町歩兵第三十三聯隊 太田 外茂次(大三)  
岐阜縣立病院 野手 雅信(大四)  
東京千駄ヶ谷八五六 乙部 元治(大四)

●轉居

東京市本郷 駒込神明町七〇 鬼頭 英  
東京市築地施療病院 武田 正壽(三二)  
東京下谷上根岸七二 輕部 修一(三四)  
千葉縣船橋町九日市 清水 秀夫(三五)  
名古屋市工兵第三大隊 佐野 愛二(三七)  
東京府下澁谷中澁谷 松村 四郎(三七)  
東京府荏原郡大井町一〇三五 江守 武(三八)  
大分縣南海部郡佐伯町 山内 兎毛(三八)  
舞鶴海軍工廠 長井 運男(三八)  
高岡市御旅屋町 鷺山 謙吉(三八)  
東京市芝區高輪北町三一 小出 貞次郎(三九)  
京城南山町一丁目十六番地 岡 忍(四〇)  
福井市清川下町三番地 長田 八三郎(四一)  
朝鮮南海道新溪守備隊 高崎 英彦(四三)  
臺灣花蓮港廳吉野移民指導所醫務室 大武 國治(四四)  
神戸市中正手ノ通り七丁目三一〇九柳田方 大谷 顯治(四四)  
北海道岩見澤。岩見澤病院 大村 作太郎(四四)  
大阪歩兵第三十七聯隊第五中隊 高橋 甚一(四四)  
東京小石川區仲町五六 中村 議助(四四)

●左記の諸君は一月號雜誌配達し得ず御存知の方は御通知願上候  
高岡市一番町五二 宮井 勇(三三)  
朝鮮全羅南道長城噓託警察醫 西尾 岱抱(三七)  
福知小歩兵第二十聯隊 内海 友七(三九)  
歩兵第二十二聯隊 柿澤 雅一(四〇)

大阪砲兵工廠醫務室軍醫  
千葉縣夷隅郡大多吉町常盤病院  
北海道岩見澤驛鐵道俱樂部內  
東京近衛歩兵第一聯隊第九中隊

山 川 宮 三(四〇)  
松 尾 整(四四)  
五十嵐 齊(大元)  
涌井正雄(大三)

# 會 告

● 自大正四年十二月十九日校外特別會員會費納付調書  
至大正五年一月二十三日

金 額 期 限 氏 名

一金參圓也	自大正四年度四ヶ年分	井 澤 篤 治殿
一金四圓六拾錢	自大正四年度五ヶ年分	松 村 四 郎殿
一金貳圓六拾錢	自大正四年度三ヶ年分	野 手 雅 信殿
一金壹圓六拾錢	自大正五年度二ヶ年分	小 林 良 二殿

以 上

## ● 創立二十五年記念館寄附金第十八回報告

(一月二十四日迄ノ分)印ノモノハ現金領収済ノ分)

金 額	氏 名	金 額	氏 名
一金五圓也	島 田 靜 男殿	一金參圓也	濱 野 文 吉殿
一金參圓也	松 江 意 之殿	一金五圓也	高 橋 秀 殿
一金壹圓也	吉 田 繁 治郎殿	一金五圓也	松 田 準 殿
一金參圓也	鹿 野 重 太郎殿	一金五圓也	大 木 則 雄殿

一金拾圓也	江 崎 恒 人殿	一金參圓也	石 森 國 治殿
一金參圓也	增 谷 宗 殿	一金參圓也	下 間 仲 一殿
一金參圓也	久 保 裏 一 郎殿	一金五圓也	松 々 枝 真 九 郎殿
○宮島健治殿	一金五圓也	○沼田布之殿	
川上操一殿	一金參圓也	○佐竹秀一殿	
井澤篤治殿	一金壹圓也	土門寅造殿	
増谷麟殿	一金五圓也	吉住保殿	
田川益三郎殿	一金五圓也	岡田久多殿	
増田貞吉殿	一金參圓也	堀田慎之殿	
○田中新太郎殿	一金參圓也	○齊藤房治殿	
有壁一雄殿	一金參圓也	神内甚六殿	
鈴木英男殿	一金五圓也	柳町茂家殿	
柳町茂家殿	一金參圓也	中野憲吉殿	
久田德殿	一金貳圓也	水口順殿	
中曾根包吉殿	一金參圓也	○高橋重二殿	
細川孝一殿	一金參圓也	岩田利三郎殿	
坪倉利殿	一金拾圓也	村上麻次郎殿	
○芦澤孝治殿	一金參圓也	○坂井貞準殿	
○松村四郎殿	一金參圓也	○諸橋善三郎殿	
○石黒傳六殿			
○第二同分			
澤井孝昌	牧 有義	川名達雄	南 兵太郎
竹内又佐	橋本學	内海元一	豐田俊藏
紺田孫助	西 雅憲	向井龍雄	井上啓太郎
前田文作	八川修二郎	古川定雄	岸 真一
北 弘	越野勇吉	小山元熙	矢野嘉一
			高橋 豐

醫學科四年生

# 廣告

## 上田先生鑄銅像完成に就て

恩師上田先生一度本校に御就任せらるゝやその崇高美麗なる人格を以てその宏遠なる蘊蓄を以て生理學にはた細菌學に終始一貫一身を犠牲とし名利を泥土とし青衿誘掖の爲に渾身の心力を傾倒せらるゝ事實に十有九星霜吾校千百の門生をして皆其成功に多大の貢獻を垂れ給ひし事萬人の均しく仰ぐ處なり。

噫然るに今や御健康勝れ給はず本校を辭せらるゝに當り吾等門下生其學を仰いで止まず其德を慕つて止まずせめて其御肖像を鑄して先生が御風望を偲び御學德を欣慕せんとし先に醫學科學生釀金する處ありしに今や該鑄銅像完成の運に至りぬいま其像を検するに未だ嘗て見ざる出來榮にして眉宇の間御肖像を髣髴とし宛も御警咳に接するの感あり即ち以てこれを本校細菌實習室に掲ぐ。

今や永久に本校を訪ふ吾等門下生をして其德を仰がしむべく朝夕我校後進のものをして鞭撻する處あらん。

水島 宣	山中進一郎	丹 忠一郎	中山 茂松	大西 清治
西田 義忠	岩月 昇平	今井 三郎	安宅富太郎	野村 二郎
眞野 武雄	高島 一郎	松波 秀吉	上池 林彌	藤田 畦一
花井 正真	河崎岩太郎	入澤 伴次	石原 巖	内堀 純三
川越 清造	朝賀 政雄	鶴見 元雄	水島 亨	白石 又城
青木 一治	桐林 茂	宮地 幾也	川北 隆吉	德弘 至之
須崎 敏雄	佐野 四郎	古川 省三	西岡 武二	三浦 勝吉
滿田 昇	吉田 少二	井出 欽一	山本 辰吉	平野 宗甫
有山武兵衛	宮森 基	本江慶太郎	佐野 雄平	知原 完治
安田 忠雄	落合 茂利	傳田 昶	狩野 藤作	奥野和三郎
渡邊蜜太郎	瀨川 龍二	柴田 周吉	津田 順成	橋 進之丞
佐野 悦二	金山 寅雄	竹村 虎雄	佐伯 尙平	北外佐太郎
○時國恒 夫殿				

計金貳百圓也  
累計金四千拾五圓七拾五錢也

### ▲第十七回報告後現金領収ノ分

一金五圓也	今井 玄三松殿	一金參圓也	武曾 三郎殿
一金參圓也	柳 瀨恒作殿	一金參圓也	小泉 義久殿
一金五圓也	岩 井 尊宗殿	一金貳圓也(第一分)	井澤 篤治殿
一金五圓也	織田 信義殿	一金參圓也(同分)	小林 良二殿
一金參圓也	重 田 稔殿	一金貳圓也(第二分)	山村 茂一殿
一金參圓也	割 石 貞二殿	一金壹圓也(同分)	鷺田 發次郎殿
一金參圓也	中山 靜二殿	一金參圓也(同分)	山崎 内藏三殿
一金參圓也	中林清右衛門殿	一金參圓也	中橋 末吉殿
以 上			

因に該鑄像の水野源六氏並其息朗氏の製作に係るものにして朗氏の原型製作嚴父源六氏の鑄金に依るものなり尙鑄像完成に至りては生理學教室柴野順吾氏の多大の盡力を得たり爰に深く感謝す。(宮森生)

謹啓時下寒冷之候益々御清祥奉賀候陳者金澤醫學專門學校教授上田計二先生今般御退職相成候ニ就テハ先生カ多年教育ニ盡瘁セラレタル功勞ニ酬ヒ併テ謝恩之微意ヲ致シ度紀念品贈呈之計畫致候間何卒左記各項御賛同被下度此段得貴意候早々敬具

一、鑲金額ハ金壹圓以上ニ相願度候

一、鑲金ハ振替貯金口座番號大阪貳九七貳七番金澤醫學專門學校衛生細菌學教室兒玉豐治郎宛ニ願上候

一、鑲金ハ大正四年二月二十八日迄ニ願上候

一、領收證ハ別ニ發送仕ラス十全會雜誌ニテ發表致ス可ク候

一、贈呈物品等ニ就テハ發起人ニ御一任被下度候

大正四年十月

發 企 人 (イロハ順)

◎石坂 伸吉 飯森益太郎 石坂直次郎 伊藤 喬 石川 精一  
伊藤 又吉 池田 菱吉 石川 寛二 ◎石黒 四郎 ◎林 篤  
林 豐丈 八田 智證 平手 秀敏 富田 豐咲 湯 爾和

額 又太郎 沼田 準三 岡島 真吉 岡本 三作 太田・長作  
太田 尙男 小原 隼三 小幡 一志 奥山 義盛 織田他家男  
加藤 寛 川島 俊 加藤 慶三 韓 清泉 川原 武夫  
蚊野才三郎 河崎 有作 ◎米村吉太郎 吉尾 開道 田中一次郎  
竹下麗三郎 館 保二 辻本辰之助 ◎中村欣一郎 那谷 興一  
長廻 善吉 永江 直之 ◎永原松三郎 牛塚榮大郎 上野辰太郎  
野坂 賢藏 熊澤 清隆 栗山光太郎 山本兵三郎 山本 直枝  
山崎 重治 八牧 政孝 ◎松原 三郎 松村 魁 増田 真吉  
松本 乙男 前川 孝之 松田 茂 松井 清輝 ◎福岡 喜洋  
◎兒玉豐治郎 高口保太郎 越村甚次郎 越野義三郎 近藤 清吾  
近藤 時男 小池 才一 淺井 貞準 芥川 信 佐口 榮  
佐崎 伊久 喜多 禎次 清水 秀男 ◎島 誠郁 塩村和喜男  
樋口 平次 森島 彦夫 諸橋善三郎 三木 三郎 水島 時男  
◎柴野 順吾 瀨尾順四郎 杉原 幹男

●上田教授在職紀念品贈呈鑲金第一回報告

(十二月二十一日迄ノ分〇ハ申込)

金 額 氏 名 金 額 氏 名  
一金五圓也 大澤 謙二殿 一金貳圓也 上坂 熊勝殿  
一金貳圓也 村上 庄太殿 一金貳圓也 石川 喜直殿  
一金壹圓五拾錢也 須藤 憲三殿 一金壹圓也 ◎村田 金太郎殿  
一金壹圓也 ○北川 勝末殿 一金壹圓也 青山 銀之丞殿  
一金壹圓也 深美 貞之助殿 一金貳圓也 田中 正一殿  
一金參圓也 酒井 政吉殿 一金貳圓也 北 豐吉殿  
一金貳圓也 橋本 監次郎殿 一金壹圓也 天野 長重殿  
一金壹圓也 後藤 佐吉殿 一金壹圓也 新 次郎吉殿

一 金貳圓也	稻坂清八殿	一 金貳圓也	井上只次殿	一 金壹圓也	富久尾湊殿	一 金壹圓也	福田四郎殿
一 金壹圓也	猪木彦助殿	一 金壹圓也	伊藤二郎殿	一 金壹圓也	古屋興三殿	一 金壹圓也	藤岡孫喜殿
一 金壹圓也	今井外吉殿	一 金壹圓也	伊藤精一殿	一 金壹圓也	藤田孫太郎殿	一 金貳圓也	堀井吉平殿
一 金壹圓也	石譯太作殿	一 金壹圓也	池浦渡殿	一 金壹圓也	細田榮殿	一 金壹圓也	堀孝信殿
一 金壹圓也	○太田勘一殿	一 金壹圓也	小野醇殿	一 金壹圓也	丸山六郎殿	一 金壹圓也	眞澤貞一殿
一 金壹圓也	大井良八殿	一 金壹圓也	大田卯三郎殿	一 金壹圓也	眞緒修平殿	一 金壹圓也	馬詰定衛殿
一 金壹圓也	大橋忠俊殿	一 金壹圓五拾錢也	大武國治殿	一 金壹圓也	松下嘉右衛門殿	一 金壹圓也	柳原茂樹殿
一 金壹圓也	鎌田勘之助殿	一 金壹圓也	加藤敏助殿	一 金壹圓也	山田幸吉殿	一 金壹圓也	吉江衆吉殿
一 金壹圓也	上池林次郎殿	一 金壹圓也	水谷義太郎殿	一 金壹圓也	渡邊十治殿	一 金壹圓也	松本繁正殿
一 金壹圓也	久津木勝作殿	一 金壹圓也	桑折直殿	一 金壹圓也	和田政範殿	一 金貳圓也	渡邊常三郎殿
一 金壹圓也	栗林信殿	一 金壹圓也	國田武雄殿	一 金壹圓也	北村誠吾殿	一 金壹圓也	原田定次殿
一 金壹圓也	窪美良殿	一 金壹圓也	後藤義賢殿	一 金壹圓也	石出壽夫殿	一 金壹圓也	永野保一殿
一 金壹圓也	駒田作之進殿	一 金壹圓也	澤田辰造殿	一 金壹圓也	○松田外二郎殿	一 金壹圓也	○春野重二殿
一 金壹圓也	佐々木茂樹殿	一 金壹圓也	佐藤邦二郎殿	一 金壹圓也	能木場與三吉殿	一 金壹圓也	中本覺二殿
一 金貳圓也	七五三龜吉殿	一 金壹圓也	重田稔殿	一 金壹圓也	上原寅太郎殿	一 金壹圓也	西業求殿
一 金壹圓也	清水憲策殿	一 金壹圓也	鈴木於菟吉殿	一 金壹圓也	內藤榮治殿	一 金壹圓也	子安頼義殿
一 金壹圓也	鈴木伊作殿	一 金壹圓也	鈴木彌殿	一 金壹圓也	早藤市郎殿	一 金壹圓也	田中清次殿
一 金壹圓也	鈴木忍殿	一 金壹圓五拾錢也	住田立殿	一 金壹圓也	北村米三郎殿	一 金壹圓也	牧眞武殿
一 金壹圓也	建部鈴次郎殿	一 金壹圓也	田中信一殿	一 金壹圓也	松田喜作殿	一 金壹圓也	田村惣七郎殿
一 金壹圓也	角田耕六殿	一 金貳圓也	遠山正輝殿	一 金壹圓也	○時國恒夫殿	一 金壹圓也	○岡部博殿
一 金壹圓也	成田成治殿	一 金壹圓也	並河茂樹殿	一 金壹圓也	長外喜男殿	一 金壹圓也	井手永一殿
一 金壹圓也	中川善松殿	一 金貳圓也	並河正雄殿	一 金壹圓也	中條隆之助殿	一 金壹圓也	松原義憲殿
一 金壹圓也	中原德彌殿	一 金壹圓也	南部建一殿	一 金壹圓也	石坂伸吉殿	一 金壹圓也	秦正胤殿
一 金壹圓也	中原重吉殿	一 金壹圓也	長村吉太殿	一 金參圓也	○石黒四郎殿	一 金貳圓也	飯森益太郎殿
一 金參圓也	野獄利七殿	一 金壹圓也	濱地藤太郎殿	一 金參圓也	池田菱吉殿	一 金貳圓也	伊藤喬殿
一 金壹圓也	馬場庄江殿	一 金壹圓也	藤波謙殿	一 金貳圓也			八田智証殿

湯 爾 和殿	一金五圓也	加藤 寬殿	一金壹圓也
川 島 俊殿	一金壹圓也	○川原武夫殿	一金壹圓也
米村吉太郎殿	一金壹圓也	吉尾開道殿	一金壹圓也
辻本辰之助殿	一金拾五圓也	○中村欣一郎殿	一金壹圓也
上野辰太郎殿	一金貳圓也	山本直枝殿	一金貳圓也
八牧政孝殿	一金五圓也	松原三郎殿	一金壹圓也
增田貞吉殿	一金參圓也	前川孝之殿	一金壹圓也
兒玉豐次郎殿	一金貳拾圓也	福岡喜洋殿	一金貳圓也
佐口 榮殿	一金壹圓也	○柴野順吾殿	一金壹圓也
鹽村和喜男殿	一金參圓也	森島彦夫殿	一金壹圓也
一 金壹圓也		杉原幹男殿	一金壹圓也
瀨尾順四郎殿	一金參圓也		
合計金參百四拾五圓五拾錢也			
現金受領高參百拾參圓五拾錢也			

●上田教授在職紀念品贈呈醴金第二回報告

氏 名	金 額	氏 名	金 額
小池才一殿	一金壹圓也	淺井員準殿	一金壹圓也
諸橋善三郎殿	一金壹圓也	山崎重治殿	一金壹圓也
山本兵三郎殿	一金壹圓也	岡本規矩男殿	一金壹圓也
加藤慶三殿	一金壹圓也	松井清輝殿	一金參圓也
石坂直次郎殿	一金五圓也	松村四郎殿	一金貳圓也
永原松三郎殿	一金壹圓也	山崎清吉殿	一金貳圓也
牛塚榮太郎殿	一金壹圓也	小島顯治殿	一金貳圓也
杉部多米吉殿	一金壹圓也	石崎喜一郎殿	一金貳圓也
一 金貳圓也		島 誠 郁殿	一金貳圓也
太田精一殿	一金拾五圓也		

宮城篤珍殿	一金壹圓也	齊藤房治殿	一金壹圓也
齊藤義雄殿	一金參圓也	周 頌 聲殿	一金壹圓也
松村 魁殿	一金壹圓也	平野郷次郎殿	一金壹圓也
清水 亮殿	一金壹圓也	廣瀬竹次郎殿	一金壹圓也
蚊野才三郎殿	一金壹圓也	輕部修一殿	一金壹圓也
宇佐美保之殿	一金壹圓壹錢也	庄司正義殿	一金壹圓也
清水秀夫殿	一金貳圓也	韓 清 泉殿	一金壹圓也
厲 家 福殿	一金貳圓也	錢 崇 潤殿	一金壹圓也
渡邊宗一郎殿	一金壹圓也	桐田健三郎殿	一金壹圓也
武內清作殿	一金壹圓也	芥川 信殿	一金壹圓也
村山三男三郎殿	一金壹圓也	荻野茂次郎殿	一金壹圓也
尾倉一英殿	一金壹圓也	山路政一殿	一金壹圓也
千田常外殿	一金壹圓也	佐竹秀一殿	一金壹圓也
三木三郎殿	一金貳圓也	柳 原 隆殿	一金壹圓也
馬場 稠殿	一金貳圓也	西原愛太郎殿	一金壹圓也
德久恒治殿	一金壹圓也	南 茂 吉殿	一金壹圓也
丹 玄 純殿	一金壹圓也	平手秀敏殿	一金壹圓也
吉田文平殿	一金壹圓也	長田八三郎殿	一金壹圓也
深澤治三郎殿	一金壹圓也	松江鐵五郎殿	一金壹圓也
西村順八殿	一金貳圓也	中川久成殿	一金壹圓也
大藪關重殿	一金壹圓也	佐藤 進殿	一金壹圓也
松田研吉殿	一金壹圓也	福里次吉殿	一金壹圓也
小計金壹百五圓壹錢也			
總計金四百五拾圓五拾壹錢也			
現金受領高金四百拾八圓五拾壹錢也			